

日本脈管学会における最近の活動

矢崎 義雄

はじめに

第 50 回日本脈管学会学術集会において、日本脈管学会 50 周年記念特別企画のシンポジウムが開催され、石川浩一先生および田辺達三先生が記念講演をされた。石川先生は本学会の設立時に世話人として中心的なご活躍をされていたことから、日本脈管学会発足時の経緯についてエピソードを含めて、当時の豊富な資料を交えてお話をいただいた。田辺先生には、難治性血管炎の厚生省厚生科学研究班でのご活動を中心に、その後の日本脈管学会の発展の状況について、学術集会のプログラム等を紹介しながらご説明いただいた。そして私は、その後の日本脈管学会の最近の動向についてご報告し、シンポジウムは終了した。そこで、私の講演した部分をまとめ、特別企画としての責務を果たしたい。

日本脈管学会における最近の活動

医療を取り巻く環境が著しく変化し、学会の活動にも大きく反映するようになった。とくに、昭和 55 年にはじまった医療費の抑制政策により、医療、とくに高度先進医療を担う病院への診療報酬が抑制され、運営が厳しくなる一方、医療安全への国民の要望が強くなり、勤務医はその対応に追われて過重な負荷が加わって厳しい労働条件となって、病院における医師不足が社会的にも大きな課題になっている。すなわち、医療に対する国民の意識が大きく変革し、従来の医療は全て医師にまかせるというパターナリズムから、患者が自己の価値感を、受ける医療の選択に反映させたいという、医療評価の大きなパラダイムシフトが出現するところとなった。

日本脈管学会は、このようなわが国における医療の大きく変化する状況をとらえ、時代と社会のニーズに応えて、脈管疾患の診療の質向上と均てん化を目指して活動することが求められている。そこで、学会としての組織

の在り方、学会認定専門医制度の創設、そして学術機関誌である「脈管学」と英文誌「Annals of Vascular Diseases」の最近の動向について述べたいと思う。

日本脈管学会会則(定款)の制定

そもそも日本脈管学会は、解剖学、生理学、薬理学、病理学といった基礎医学から、内科、外科、放射線科といった幅広い臨床医学の研究者によって構成されていることから、学会としての組織形態は、各領域の研究者が皆等しく参加でき、そして参加者の総意で運営するという視点から、任意団体の形式をとり今日まで 50 年間経てきたところである。しかし、医療を取り巻く環境が著しく変化したことから、学会活動の基盤を固める必要性が認識されて、学会を社団法人として設立するための会則、すなわち定款の制定が、2002 年より理事会で検討されるようになった。そして、2003 年の日本脈管学会の総会にて現行の定款が認定されるに至った。

その内容は、第 1 条に学会の名称を日本脈管学会とするとともに、英文では Japanese College of Angiology とした。

第 2 条の学会設立の目的として、「本会は日本脈管学に関する様々な分野の最先端研究を統合し発展させること、その研究成果を社会に還元するためのシステムを作り実施すること、次世代を担う若手研究者を育成することをその目的とし、これらを通じて学術文化の発展に寄与する」としている。そして、会員、評議員、理事などの組織運営体制も明文化され、学会としての活動の規範がようやく制定されることとなった。体制を整備することにより学会がさらに活性化するものと期待される。

日本脈管学会専門医の制定

脈管疾患の診療に当たっては、内科、外科、放射線科などの専門領域を超えた総合的な知識と経験が必要であり、その診療の質の向上と均てん化には、専門かつ総合

的な視点から専門医の育成が喫緊の課題であることが従来から指摘されていた。そして、日本脈管学会の定款制定の議論の中で、脈管疾患の診療を担う専門医の在り方が検討され、その専門医制度の創設が明確な課題となった。2005年から、日本脈管学会において専門医制度を検討するワーキンググループが組織され、具体的な内容についての議論が行われ、2007年に脈管専門医制度が認定されて発足するところとなった。

日本脈管学会認定脈管専門医制度規則の第1条として、「この制度は、脈管学の進歩発展に伴い、日本脈管学会が、大血管、末梢血管、リンパ管を中心とした脈管診療を担当している優れた医師を専門医として認定し、多領域に渡る脈管学の知識を横断的に共有することで、脈管学並びに脈管診療の向上を図り、もって脈管疾患に苦しむ多くの患者が安心して医療を受けることができる環境をつくり、国民の福祉に貢献することを目的とする」と、本制度の目的が述べられている。2007年に日本脈管学会総会にて正式に承認されて、2009年には脈管専門医の認定試験が実施され、166名の合格者が専門医として認定された。そして、今日まで指導的な立場で第一線でご活躍いただいていた276名の先生方を経過措置として専門医に認定した。このように、脈管専門医制度が無事に発足することとなった。このような専門医制度の確立により、わが国における脈管診療のさらなる向上と、国民の信頼を受けた診療の実践および均てん化が実現するものと期待されている。

日本脈管学会の国際的な活動

本学会は、設立当初より国際的な活動が活発に行われヨーロッパでの活動が中心の国際脈管学会(International Union of Angiology; IUA)および米国を中心とした脈管学国際連合(International College of Angiology; ICA)と密な連携が行われ、学会設立翌年である1961年には、日本脈管学会の代表が第4回IUA世界大会に出席し、その後三島好雄先生を中心に多くの代表が参加されて、活発な学会活動が行われて情報発信に努力され、両学会における日本脈管学会の果たす役割が大きくなった。

その結果、1976年には第10回IUA世界大会が石川浩一先生により、そして1998年に第18回世界大会が、筆者のもとで開催され、さらに1999年に第41回ICA世界大会が安田慶秀先生により開催された。

東京で1998年に開催されたIUA世界大会には、アジア

やヨーロッパ、北米の諸国はもちろんのこと、南米やアフリカ、そして中東からも総勢千人を超す参加者を得て、活気あふれた国際学会となった。とくに、脈管に関する分子生物学の手法をフルに活用した研究の最新情報が数多く発表される一方、臨床的にも大血管へのステントグラフトの導入や、最新鋭の画像診断法の開発など、魅力あふれた知見が紹介されて大変活発な議論があり、盛況を呈した。その後、重松 宏本学会理事長がアジアセクションの会長に就任され、わが国のみならずアジアから脈管学に関する最新の情報を世界に発信しているところである。

日本脈管学会としての学術機関誌である「脈管学」を発行して、脈管疾患に対する治療や診断法の目覚ましい発展についての最新情報を、専門医ばかりでなく、一般臨床医を含めて幅広く伝える大きな役割を担っている。とくに、「脈管学」は基礎医学から内科、外科、放射線科などの広い領域を統合的な視点からの情報発信に努めており、最近の各種学会が専門分野に先鋭化する趨勢にあることから、大変貴重な存在になっていると自負している。

一方、国際的な視点から情報を発信する必要から、英文誌の発行が喫緊の課題になっていた。そこで、わが国における脈管学に関する研究と臨床研究の成果を国際的に広く発信すべく、日本血管外科学会と日本静脈学会と共同で新たに、英文誌「Annals of Vascular Diseases」が発刊され、学会としての情報発信機能が飛躍的に向上するところとなった。

おわりに

—50年の歩みを振りかえって

日本脈管学会は、今日まで50年にわたって脈管学領域で幅広く、研究と診療の発展に大きく貢献してきた。設立時の創生期の活動とご苦勞を、石川先生より貴重なエピソードを交えて、50周年記念講演会でお話いただいた内容が、「脈管学」に掲載され、記録史として後生に伝わることはさきわめて重要であり、特別企画された方々に深甚の感謝を述べたい。また、田辺先生より日本脈管学会の活動を主に支えた「難治性血管炎」調査研究班でのご活躍を中心に講演いただいた内容も、特別企画として掲載されることとなり、これも大変貴重な記録になるものと期待される。

本稿では、日本脈管学会の最近の活動について記載させていただいた。人口の高齢化とともに経済成長の停滞など、外的な要因によって医療を取り巻く環境が著しく

厳しい状況となり、学会活動も社会と時代のニーズに応えた体制の整備を含めて検討されることとなった。このような視点から、定款の策定を中心とした学会組織の明確化、専門医制度の創設、学会誌「脈管学」とともに国際的

に情報を発信するための英文誌「Annals of Vascular Diseases」の創刊、そして国際学会の開催などを記載させていただいた。新しい時代を迎えて、日本脈管学会のさらなる発展を心より祈っている次第である。